

編集後記

2013年度は、文部科学省私立大学戦略的研究基盤形成支援事業「東亜同文書院を軸とした近代日中関係史の新たな構築」プロジェクトの第2年目の年であった。それとともに、5つの研究会が本格的に始動し始めた年でもあった。

本年度はまず7月に名古屋校舎で、本センターと台湾の孫文の記念館である国父記念館、東呉大学との共催で、「孫文と東アジアの平和」という国際シンポジウムを行った。この台湾側の団は、神戸の孫文記念館(移情閣)と本センターをピンポイントで指定しての国際シンポジウムを行い帰国したが、台湾でも本センターの認知度が高まっていることを強く感じた。またこのシンポジウムを契機にして、国父記念館の発行している全世界の孫文記念館を紹介した『全球孫中山記念館』に本センターも載せてもらうことになった。

12月には2日間にわたって、本センター主催により名古屋校舎で国際シンポジウム「近代日中関係史の中の東亜同文書院」を行った。初日は本プロジェクトの研究会の第2グループメンバーによる「東亜同文書院・大調査旅行から見る近代アジア」、2日目は第1グループメンバーによる「東亜同文会・東亜同文書院と日中関係史の再検討」の報告を行った。このシンポジウムで報告した論文に就いては、すでに『同文書院記念報』VOL22別冊①②に収録したので、本号では当日の趣旨説明と討論の内容を収録した。

昨年の10月には、東亜同文書院生の上海への出発地であった長崎で「東亜同文書院大学から愛知大学へ」という展示会と講演会を本センター主催、長崎新聞社、公益財団法人愛知大学教育研究支援財団の後援で行った。ここでは講演会での佐藤元彦学長のご挨拶を載せると共に、横山宏章氏(北九州市立大学教授、元長崎シーボルト大学学部長)による「長崎と近代中国」、小崎昌業氏(東亜同文書院大学第42期生、愛知大学第1期卒)による「東亜同文書院大学から愛知大学へ」を掲載したが、特に小崎昌業氏は、外務省時代の貴重なお話をされ、私にとっても初めてお聞きする事柄であった。その他にセンター関係者の講演を掲載した。

論文では本センター関係者による「辛亥革命と東亜同文会」「1920年の華北大旱害をめぐって—東亜同文書院の調査旅行が同文書院の調査を走らす—」「大村欣一東亜同文書院教授について—経歴、担当科目、中国観を中心に—」「清末民初期における日本からの水産輸入品とその変化—『大旅行』報告書をもとに—」を掲載した。今後、本センター関係者による、より積極的な論文投稿をお願いしたい。

資料紹介の中で特筆すべきは、本間喜一先生がフェンシングとのかかわりがあったという貴重な資料を掲載できたことである。

第20回東亜同文書院記念基金会の記念賞は岡部達味氏(東京都立大学名誉教授、元霞山会理事)、功労賞に平井誠二氏(公益財団法人大倉精神文化研究所研究部長)が選ばれたが、それぞれの推薦の言葉と受賞挨拶を掲載した。

その他で特筆すべきは、最近中国の深圳に1900年の惠州蜂起を記念する「庚子首義彫塑公園」ができたが、山田兄弟の縁者である岡井禮子さんがそこに行き、山田良政像にも対面したときの訪問記を掲載した。中国でも既知の中国近代史研究者を別にして、今後一般の人々にも山田良政が知られることになるであろう。

2014年3月13日

東亜同文書院大学記念センター長 馬場 毅